

能の舞台

日本の古典的な戯曲や舞踊を披露するための伝統的な演劇の形態である能は、岡山後楽園の屋外の舞台にて上演されています。栄唱の間や墨流しの間などといった周囲にある建物は観客のための座席として役割を果たします。これらの建物は延養亭や鶴鳴館といった後楽園内にあるその他の重要な建物へと廊下で繋がっています。

後楽園の屋外にある能の舞台を訪れば、昔と変わらない能の上演を体験するチャンスがあります。かつては能の上演は寺や神社の境内で行われることが多かったのですが、現在では1つの建物内で舞台や観客のための座席が提供されることがより一般的となっています。

後楽園を建てた大名である池田綱政（1638-1714）は能の上演を鑑賞して楽しんだり、家臣の家族らや、城下町や領地の民たちを楽しませるためにときに自らも能を演じたりしたといえます。しかし、その後継者である池田継政（1702-1776）は綱政ほど能に興味を持っておらず、周囲の建物の大きさを小さくしてしまいました。1945年には、庭園、舞台、そして付属する建物らは空襲によって破壊されてしまいました。現在の舞台と庭園は、18世紀の構造に基づいてこれらの特徴を再構築するために、1958年に着手され完了したプロジェクトの結果です。

伝統的に、能は1本の古い松の木の前で演じられていました。松の木は神々が宿るとされていたのです。今日では、後楽園のものも含めて、能の舞台のほとんどは舞台の後ろの壁に描かれた松の木の絵を特徴としており、そうすることでこうした伝統を継続させています。岡山の熟練した日本画（日本流）家である芸術家の池田遙邨（1895-1988）が、再建された後楽園の舞台のための松の木の絵や、それに伴う青竹の藪の絵を描きました。

舞台の左側には橋掛かりと呼ばれる舞台裏から主舞台までを繋ぐ斜めに架かった橋があります。橋掛かりは主役たちがあたかも遠くの場所から来ているかのように入場するのを演出するために使うことができます。小さな3本の松の木が背の高いものから

順番に並べられ、橋に沿って立っています。こうすることでさらに奥行きを強調するのです。白い砂利が敷き詰められた壇がステージを囲んでおり、光を反射して舞台上の俳優をより明るく照らせるようになっています。白い砂利の敷かれた場所を挟み、ステージに面しているのが栄唱の間です。ここは観劇する大名や人々が座る場所となっていました。

能と狂言（喜劇的な幕あい）の上演は後樂園にて今でも年に数回ほど行われています。また、後樂園では日本の各地の能の流派による上演も主催しています。